

令和五年三月

選者

俳人協会評議員

「りいの」同人会長

山崎祐子先生

特定選者

秋田県支部

「海」同人

斎藤淳子氏

「香雨」同人

熊谷尚氏

「香雨」同人

泉千穂子氏

主催 俳人協会 秋田県支部

第二十六回

支部会員鍛錬紙上句会

得点	番号	2	3	6	3	5	3	4	1	1	1	4	1	1
1	漱石忌渾名呼び合ふクラス会	瞬きて星と交信聖樹の灯	2	1	1	1	1	4	3	2	1	1	1	1
1	冷えまじや古代の塚は石ひとつ	一刹にもみじ且つ散る石畳	1	1	1	1	1	5	6	5	5	4	3	2
1	書き初めの千思万考身を諫む	書き初めの千思万考身を諫む	1	1	1	1	1	7	8	9	10	11	12	13
1	病むときはしばし息抜き浮寝自	病むときはしばし息抜き浮寝自	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	一陣の風綬帳の如落葉	一陣の風綬帳の如落葉	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	余後なるも出席します初句会	余後なるも出席します初句会	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	呼び捨てで呼び合ふ仲や狸汁	呼び捨てで呼び合ふ仲や狸汁	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	ミシンかけ出来ぬ娘ばかり針供	ミシンかけ出来ぬ娘ばかり針供	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	色変へぬ松の根つ子にある悪魔	色変へぬ松の根つ子にある悪魔	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	出羽富士を座標に据ゑて雁渡	出羽富士を座標に据ゑて雁渡	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	亀蚯蚓鳴かせ年中マスク顔	亀蚯蚓鳴かせ年中マスク顔	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	青首の青さも青し大根引く	青首の青さも青し大根引く	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	木の葉舞ふ音色は風のオルゴール	木の葉舞ふ音色は風のオルゴール	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	父の家大きく跨ぎ去年今年	父の家大きく跨ぎ去年今年	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	枕木に小春を乗せて一両車	枕木に小春を乗せて一両車	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	水底に眠りてこそその落葉かな	水底に眠りてこそその落葉かな	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	杉伐つて冬夕焼を満喫す	杉伐つて冬夕焼を満喫す	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1
1	冬日背に積読の書を開きけり	冬日背に積読の書を開きけり	1	1	1	1	1	7	6	5	4	3	2	1

麻生 大橋 風太
大橋 風太
松橋 テル子
松橋 テル子
松橋 テル子
松橋 テル子
園部 蘿鄉
園部 蘿鄉
加藤 一弥
加藤 一弥
加藤 一弥
加藤 一弥
加瀬谷 敏子
加瀬谷 敏子
加瀬谷 敏子
加瀬谷 敏子
加藤 栄女
加藤 栄女

得点	番号	2	10	1	2	3	4	1	1	1	5	2	1	1
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
放たれて犬が駆け出す冬田かな 大根を燻して己が皺ふやす 狛犬に留守を託して神の旅 佐助やお茶の教授の住まふ路地 物干しや瞑想したる冬の蟬 散るもまた花桜のひそかなる 手にしても鏡嫌ふや冬帽子 氣嵐やゴジラの影の渾淵船 雪吊や庭師の業が宙に舞ふ あら玉の見馴れた顔を整へし 年のは夜腕枕猫喉鳴らす 初雪に竹白幹のしなむかな 折鶴に託す病棟冬日射す 雪しまき電池の切れた古時計 スノーダンプ腹に力の雪下ろし 老僧の跡継ぎ自慢臘八会 ショールぬぎ小さき画廊にバツハイ	ト ラ ッ ク の 往 来 は げ し 一 月 冬 鷗 釣 り 人 な ら ぶ 波 止 場 か な 初 春 や 贈 る 時 き 絵 の 夫 婦 橋 老 僧 の 跡 繰 ぎ 自 慢 腊 八 会 折 鶴 に 託 す 病 棟 冬 日 射 す 雪 し ま き 電 池 の 切 れ た 古 時 計 ス ノ ー ダ ン プ 腹 に 力 の 雪 下 ろ し 初 雪 に 竹 白 幹 の し な む か な 年 の 夜 腕 枕 猫 喉 鳴 ら す 初 雪 に 竹 白 幹 の し な む か な 折 鶴 に 託 す 病 棟 冬 日 射 す 雪 し ま き 電 池 の 切 れ た 古 時 計 ス ノ ー ダ ン プ 腹 に 力 の 雪 下 ろ し 老 僧 の 跡 繰 ぎ 自 慢 腊 八 会 シ ョ ー ル ぬ ギ 小 サ キ 画 廊 に バ ツ ハイ													

高田 洋子
高田 洋子
明沢 瑛子
明沢 瑠子
高橋 恭三
高橋 恭三
高橋 恭三
高橋 恭三
瀬川恵美子
瀬川恵美子
大原たかし
大原たかし
明天地ひろし
明天地ひろし
岩谷 岩谷
岩谷 岩谷
岩谷 岩谷
岩谷 岩谷
塵外 嘉山 嘉山

	2	3	1	3	3	1	1	1	1	1	6	1	得点 賀状
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	45
老い先の話題制して女正月	冬晴れや学童はしやぐ運動場 新しき希望背負ひて兎かな	夫婦して互ひ労らふ年忘れ 通夜の灯の揺るる旧家や隙間風 うどん屋の仕事始の湯を沸かす 松取れてなにやら寂し門あたり	蹲の水と語るや霜の声 追われても行き所なき冬の蠅	牛歩と書く色紙掲げて老の春 しのびよる冬の気配や小夜嵐 役果たしまどろむ冬の雄物川 雪吊はますらだけをの綾取りか 大根の重さいただく散歩かな 髪を剃り襦袴の売り来る伊勢曆 枝摇らし虫を飛ばせて雪囲 継ぎ足しの瘤の荒縄雪囲	41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60								

長川ユリ子 遠山せつ子
宇佐見レイ子 宇佐見レイ子
島きく子 島きく子
島きく子 島きく子
島きく子 島きく子
岡部いさむ 岡部いさむ
岡部いさむ 岡部いさむ
岡部いさむ 岡部いさむ
岡部いさむ 岡部いさむ
岡部いさむ 岡部いさむ

得点 番号	5	4	3	2	1	3	1	3	1	3	86	85	84	83	82	81	
100	99	98	97	96	95	93	94	92	91	90	87	88	89	87	86	85	
一灯に父母在りし日やきりたんぼ	本復の声はソプラノ蒲団干す	小春日や土黒々と畠整地	海坂の歪むたまゆら初日の出	洋装に落ち着く妻の春着かな	クリスマス赤きゼリーの離乳食	音楽の魔法にかかりスケーター	なまはげの怒号そこまで来てをりぬ	鯉の薄くれなる群来る	亡き母の香りほのかになづな粥	お隣の湯殿点るや除夜の鐘	円型の檻に猿ゐる寒さかな	日の当たる方より銀杏黄葉霏霏	木枯を背負ひ暗渠の埋め戻し	遺品など広げしままに初昔	新しい年新しいバリカンで	バス停に大雪のバス泳いで来	気象図に帝の指紋寒波来る

| 園部 |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 田村 蘭鄉 | 田村 蘭鄉 | 田村 阳子 |
| 佐藤 景心 |
| 佐々木あや子 |
| 佐藤 景基 |

得点 番号	101	102	103	104	105	106	107	108	109	109	108	107	106	106	105	104
120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
佐々木あや子	佐々木あや子	佐々木あや子	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基
北嶋美保子	北嶋美保子	北嶋美保子	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基	森屋 慶基
安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一	安倍 幸一
高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを	高橋みつを
佐々木公平	佐々木公平	佐々木公平	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基	佐藤 景基
竹箒かはし駆けゆく柿落葉	稻作を断念したる冬田かな	松風の音色しみじみ炉の椿	大振りの吉次つつつき年越せり	団塊の端くれも入る初笑い	九十越へ生涯仕舞いの雪舟い	子の初湯湯舟に浮かぶ小さきもの	婿様の加勢 <small>かせい</small> も貰ひ雪を搔く									

佐々木あや子	佐藤 景基															

得点
番号

5	2	1	1	1	2	3	1	1	4	3	2	2	5	5					
140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121
あいさつのきちんと出来て息白し きりたんぽ生涯抜けぬ秋田弁 行く年の堂にひしめく絵馬の声 辞してすぐ灯の消されたる寒の月 紅一輪天恵の冬薔薇 むつのはな舞ふ手鏡の小宇宙 落葉して木々はこれより夢を見る 読み止しの本を手許に冬うらら 冬ざれやお悔み欄に知人の名 年とらぬ遺影の笑顔はや三日 物思ひ途切れさせたる冬の雷 また同じ話聞かされ冬母 新築の窓やわらかに初明り 除雪車の搖るがす闇をもらいけり 朋とみて一日早し雪螢 初冬の水を吐き出す樋太し 摘みてきし青菜刻めば春の音 廃校がレストランなり年木積む 人声も消えて時雨るる舟だまり 干し網を濡らしてゆきぬ夕時雨																			

伊藤 青砂	伊藤 青砂	伊藤 青砂	伊藤 青砂	伊藤 呼溪																
米屋 道子																				
道子	道子																			
道子	道子																			
道子	道子																			

得点
番号

2	3	2	5	2	2	5	2	5	4	3	2	2	5	2	4	3	2	2	2
160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141
抱かれて聖樹見上げる病児かな 枯れるにはいまだに赤き冬薔薇 初曆ひらけばうさぎ飛び跳ねて ねむる子を抱きつつねむし暖房車 落ち込みし過去にはふれずぬくめ酒 これでよし決めた余生に冬日燃ゆ 荒縄の編目ゆるみし干大根 組板に美しき一文字妻の留守 硯海に思ひを込めて寒の水 三世代揃ひ賀はふ去年今年 初神籠身の程に合ふ幸少し 「相変はらずです」と一行賀状書く あざらしのまつ毛の長さ小春日和 明日もまた普通がよろし初御空 寒晴や灯油継ぎ足す音響き 冬日和ゆるりと「満車」点滅す 橋二つコの字に渡る小春かな ケータイの母つながらぬ寒さかな はたはたのぶりこ瞞み来て永らへる 電飾の青の明滅凍てまさる																			

米屋 道子	米屋 道子	米屋 道子	米屋 道子	泉 千穂子																
道子	道子																			
道子	道子																			
道子	道子																			
道子	道子																			

得点 番号	4	1	2	3	3	5	2	5	2	2	2	1	163	162	161
180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165
寒雷や天守に光る鰐の反り 鰐酒や乗り換へ駅のガード下 去年今年慣れず努力の新居かな おだやかに暮せる晩年初西 純白のドレスの樹樹や六の花 灯かまくら童話の国へ誘へり 初雪や妣の便りと掌に享くる 散りつくし蒼空を衝く冬木立 漁港いま舳先並べて初日の出 人の世の片隅に咲く冬すみれ 色極め芯となりたる冬紅葉 枯蓮になほ残照の響きあり 捨つる匂の一語の重き帰り花 ポイントカード捨てず使はず年送る	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166
神成 石男 神成 石男	小坂 富子 小坂 富子	塚本 佐市 塚本 佐市													
一筋や疊這ふやう冬日さす 初御空消え行く星の有りにけり	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166

得点 番号	1	3	2	1	2	1	4	6	2	2	6	1	182	181
194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	
冬探し戸口にて振る清め塙 手鏡の空がまんまる小鳥来る 日脚伸ぶ白いきいきの水墨画 風花や北限の茶の畠小さく 煮凝や昭和の味の滲みし鍋 小春告ぐ世界遺産の西馬音内 二枚戸の開かぬ一枚寒の入 初空や立てし誓ひを雲に載せ 正月の会ふ子会ふ子の良い子かな 血の滲む剃刀負けや開戦日 毛艶良き子連れの牛や牧納め めくら葡萄狂氣の色を深めたり 初雪や生家の跡地銀色に オリオンを仰ぎて行かむ散歩かな	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
塚本 佐市 塚本 佐市 塚本 佐市 藤原貢太郎 佐藤 景心 佐藤 景心	塚本 佐市 塚本 佐市 塚本 佐市 藤原貢太郎 佐藤 景心 佐藤 景心													
千葉 千葉 千葉 千葉 糸子 糸子 糸子 糸子	斎藤 斎藤 斎藤 斎藤 淳子 淳子 淳子 淳子	木村 木村 木村 木村												

伊藤 伊藤 伊藤 伊藤 伊藤 伊藤 伊藤 伊藤	山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎	佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤	塚本 塚本 塚本 塚本 塚本 塚本 塚本 塚本
慶子 慶子 慶子 慶子 慶子 慶子 慶子 慶子	雅葉 雅葉 雅葉 雅葉 雅葉 雅葉 雅葉 雅葉	景心 景心 景心 景心 景心 景心 景心 景心	佐市 佐市 佐市 佐市 佐市 佐市 佐市 佐市

第二十六回支部会員鍛錬紙上句会の成績

山崎祐子先生選

特選 氣象図に帝の指紋寒波来る

園部 路郷

【評】 上五中七で思い切った比喩を用い、下五で答えを言う。

謎掛けのような構造の句である。「帝」の語彙の背景には当然「冬帝」があるが、「冬帝の指紋」と詠んだのでは理詰めの句になってしまふ。「寒波来る」によって実感のある句となつた。これ以上知が勝ると頭で作った句になるところをうまく押さえている。

特選 初雪の一日で消ゆる忌日かな

斎藤 淳子

【評】 雪国にとつてかならずしも雪は歓迎されるものではないが、初雪は格別なものだと思う。白は清浄の色である。故人をすつと思い続けて日常を送つてはいらない。偉人の忌日でも、親しい人の忌日でも忌日の重さは同じ。「一日で消ゆる」は初雪なら当然。しかし、この語によつて忌日への切ない思いが伝わつてくる。

秀逸 円型の檻に猿ゐる寒さかな

小川 千草

同 手鏡の空がまんまる小鳥来る
佳作 繼ぎ足しの瘤の荒縄雪囲
同 追われても行き所なき冬の蠅
同 バス停に大雪のバス泳いで来
同 遺品など広げしままに初昔
同 雪達磨片眼失ふ夜明けかな

塚本 千草
佐藤 佐市
佐藤 景心
阿部 清流子
園部 路郷
田村 陽子
佐藤 景心

斎藤淳子選

特選 音楽の魔法にかかりスケーター

熊谷 尚

【評】 フィギュアスケートは、芸術性や技術の高さを競う競技の一つである。スケーターが氷上に立ち音楽が流れると、陶酔したかのように異次元の世界に瞬時に入り込んで華麗な演技を繰り広げていく。作品はその姿を「音楽の魔法」と捉えたのだ。発想力が斬新で、臨場感にあふれている。

秀逸 落葉して木々はこれより夢を見る

伊藤恵美子

同 寒雷や天守に光る鰐の反り
佳作 大根を燻して己が皺ふやす
同 円型の檻に猿ゐる寒さかな
同 行く年の堂にひしめく絵馬の声
同 抱かれて聖樹見上げる病児かな
同 漁港いま舳先並べて初日の出

神成 石男
岩谷 塵外
小川 千草
伊藤 青砂
米屋 道子
木村 登龍

はたはたのぶりこ囁み来て水らへる
初雪や妣の便りと掌に享くる
枯蓮になほ残照の響きあり
二枚戸の開かぬ一枚寒の入

神成 石男
木村 登龍
塚本 佐市
佐藤 景心

熊谷尚選

特選 人声も消えて時雨るる舟だまり

米屋道子

【評】 「人声も消えて」の措辞から、時間の経過が感じられるところが面白いと思います。その少し前まで舟や人が行き交い、賑やかだった舟だまりの様子が想像されます。しんと静まり返った舟だまりと「時雨」がとてもよく響き合つており、しみじみとした情景が描き出されていると思います。

秀逸 うどん屋の仕事始の湯を沸かす
同 めぐら葡萄狂気の色を深めたり
佳作 とりどりの薫草下がる空家かな
同 初冬の水を吐き出す桶太し
同 寒雷や天守に光る鰐の反り
同 枯蓮になほ残照の響きあり
同 本復の声はソプラノ蒲団干す

伊藤たよ女
山崎雅葉
加藤百桜
鈴木東亜子
神成石男
木村登龍
佐々木あや子

泉千穂子選

特選 初東雲水垢離取りし坊の湯氣

島きく子

【評】 初東雲にふさわしい神聖な、厳肅な光景が広がりました。お坊様の身体から出ている湯氣は温かいはずなのですが、一層冷たさを感じさせます。湯氣が場面の静かさ、嚴かさ、清らかさ、冷たさを一層際立たせていると思います。同時に新しい年を迎える上でのお坊様の決意も響いています。

秀逸 バス停に大雪のバス泳いで来
同 本復の声はソプラノ蒲団干す
佳作 洋装に落ち着く妻の春着かな
同 竹箆かはし駆けゆく柿落葉
同 むつのはな舞ふ手鏡の小宇宙
同 物思ひ途切れさせたる冬の雷
同 二枚戸の開かぬ一枚寒の入

園部蕗郷
佐々木あや子
熊谷尚
安倍幸
小林呼溪
伊藤恵美子
佐藤景心

互選の得点順位（5点まで16句）

一席	(10)	大根を燻して己が皺ふやす	岩谷	塵外
二席	(7)	本復の声はソプラノ蒲団干す	佐々木あや子	
三席	(6)	枕木に小春を乗せて一両車	加瀬谷敏子	
三席	(6)	繼ぎ足しの瘤の荒縄雪岡	佐藤 茂樹	
三席	(6)	手鏡の空がまんまる小鳥来る	塚本 佐市	
三席	(6)	煮凝や昭和の味の滲みし鍋	藤原貢太郎	
七席	(5)	出羽富士を座標に据ゑて雁渡る	加藤 一弥	
七席	(5)	折鶴に託す病棟冬日射す	明沢 瑛子	
七席	(5)	気象図に帝の指紋寒波来る	園部 路郷	
七席	(5)	あいさつのきちんと出来て息白し	伊藤 青砂	
七席	(5)	きりたんぽ生涯抜けぬ秋田弁	伊藤 青砂	
七席	(5)	人声も消えて時雨るる舟だまり	浅野 道子	
七席	(5)	これでよし決めた余生に冬日燃ゆ	米屋 法子	
七席	(5)	硯海に思ひを込めて寒の水	西 東 善秋	
七席	(5)	漁港いま艤先並べて初日の出	木村 登龍	
七席	(5)	枯蓮になほ残照の響きあり	木村 登龍	

※ 互選高点を10席としておりましたが、同点が多く16句となりました。
 賞がより多くの方に配分されるよう、複数入賞者の賞は一つに、選者
 選に入った句は無しとさせていただきました。